

手短に弔いが済ませられ、皮肉にも人数が減ったことで食糧の減りが遅くなったことから余剰した分をして昼食を摂った。食が進む状況など城内に達した頃には最早忘れられた様などころでこそあったが、孤独と空腹に苛まれた覚えのある月子が躊躇いなく食べるのを見て英一らも自然と手を付けた。そしてそれが済んだ後にはマシンの状態確認を行ったのだが、初佳の影が最後に残っていた破壊工作の結果を確かめた健が苦い顔をして一同に伝えた。

「全体としての機能はおそらく問題ない。が、電池の部分がやられてしまった。中で大穴が空いて液漏れを起こしている以上通電して起動すること自体が不可能かつ危険になっている」

「それじゃあどうしようもないんですか？」

「いや、元々電池は中身が尽きていたからそのままでは起動出来なかったのは変わらん。本来ならキャンプの非常用として持ち込んだであつた簡易発電設備を接続して蓄電し、起動するつもりだったがこうなつては瞬間的な高圧を流し込んで強引にマシンを叩き起こす以外手がなくなつてしまったのだ」

「そんな手段あるんすか？」

「余剰部品等を利用して送電線を作り、城の外に受雷針を築いて落雷を拾う、と云うのが一番穏当な手段になると思うが……」

「あの、教授」

月子が魔道書を見せた。それを見て彼もふと思ひ出した様に目を見開く。

「この魔法、利用出来るんじゃないかしら。実態がどうかは分からないけど雷の魔法らしきものが今まで発動していますから」

「ああ、確かに……。多少検証してやる必要があるだろうが、上手くすればわざわざいつ降るとも知れん雷雲を待つ必要もなくなる」

どうやら光明は残されているらしいことにどこか英一はほっとした。奏美も微笑んで月子を見ている。……魔道書の使い方について後で尋ねたところ月子は似たようなものを地下監獄で見かけたとう。持ち出しかねたものでこそあつたが、その利用法を覚えていたことは危機を打開する重要なものとなつた。頼もしいまでのこの幼馴染を相手に英一は称賛を隠さなかつたのだが、当人はそれほど喜ぶ様子もない。

「奏美が、いえ、あんたたちがそれを持つて来ていなかったらどの道無駄だったことよ」

「いや、だけどさ」

「いいのよ、別に。……私は私に出来ることをやっただけ。結局それでも救えた相手なんてたかが知れていたわ。情けない様を晒して死んだ甫土先輩だって、本来なら一緒に帰るべき部員だった筈だもの」

「……」

「ちよつと湿っぽくなつちやったわね。ごめんね。……あんたが奏美だけでも生きてここへ連れて来てくれたこと、ここまであの子を守り抜いてくれたこと、私はとても感謝しているわ。それに、あんた自身が今なおちゃんと立つてくれていることにもね」

「そう、か？ ああ……まあ、そう言ってくれるのは嬉しいけど」

「ふふ」

最後にどこかいたずらっぽく笑つて手を振つた月子は魔道書を携え健の方へ歩いて行つた。通電性があるか、また威力的にやりすぎないか検証があると云う。これとまた健及び兼輔がマシン復旧に係る最後の作業に取り組んでいる間残りの面々は自由行動となつていた。しかし昼の間にさえ何が出るとも知れぬこの城内を積極的に行う理由があるとは言い難いのが各人の思うところなのだが。た

だその中で英一は一つ確認しておきたいことがあった。五階で彼を追いつめた《捕食者》が最終的にどうなったのか生き残った面々は特に何も知らなかった。それで、少しだけ探しに行くつもりだった。「独りで行くのは危ないよ。わたしも……行く」

「分かった」

奏美がこんな風にして付いて来ることになり、二人はとりあえずは城の外を眺望しうる三階まで登ることに決めた。三階は中庭を見下ろすことも出来るので何かあれば比較的気付きやすい。これが五階まで登るとなるとそれなりに登らねばならず時間も掛かるだろうとしてやめておくことにしたのだった。……三階に着いてすぐ、二人は目にしたものに息を呑んだ。

「あれって……」

三階南の壁際に大きな黒い巨体が、まるで突き刺さる様に引っ掛かっている。その身体は身じろぎもしていない。慎重に様子を窺いながら二人はこれに近付き、その正体が《捕食者》であることを確かめた。黒い毛に覆われたその脚を触ろうと云う度胸はどちらにもなかったが、様子から見て死んでいるかの如く停まっている。おそらくあの後いつも五階から落ちたのだろう。城門が崩れてその瓦礫に埋もれてなお活動していたこの化け物がその程度で本当に死ぬものか二人には疑問に思われたもののだが、差し当たり今のところは無害そうだと云う点だけは確かめられた。ならば長居は無用だろう。念のため英一がじっとこれを見張りながら三階を離れんとする。そこで前を見ていた奏美がおもむろに声を上げて足を止めた。

「ねえ、英一くん」

「どうした？」

「あれって……」

奏美が北東の階段に小さな影を見つけた。英一にはそれがこれまで幾度も見かけた翼のそれであることが一目で分かった。

「あれは、……」

「英一くん、あれってその、もしかして……翼ちゃん？」

「分かるのか？」

「その、すぐくおぼろげだけど、昔、ちょっとだけ一緒に遊んだでしょ？」

翼とは月子にとってはもう少し長い付き合いだった一方奏美にとっては英一と知り合ってそれ程長く経たぬ内に失踪を遂げた彼の妹であるので、その姿見を覚えていないとしても不思議はなかったものだった。

「ああ。……実はあいつと、この城の周りの森から何度か見かけてはいたんだ。話し掛けたこともあったんだが、何も答えてはくれなかつたから本当に翼なのかは分からないが。だがあいつには何度も助けられているんだ。お陰で今まで命拾いしてきた様なもんだ」

「そうなんだ。もしかして、あの子のことも……誰にも信じて貰えなさそうだから、言わないでおいなの？」

「その通りだよ。気を悪くしたならすまなかつたけど」

「いいよ、もう。確かに色々思っただけど、全部わたしの狭量だったから。……英一くん、どうする？ 追いかける？」

「いいのか？」

「まだ時間はあるでしょ。少しだけでも……お話出来たらいいなって思うから」

それを聞いて英一は頷き、振り返って《捕食者》が沈黙していることを確かめた上で翼を追った。……この小さな影は行き先を特に持っていないかの様に歩き、二階の西外壁部にて停まった。英一と奏美はそこで追い付く。翼は振り返って二人を見た。どこか子供特有の好奇心を抜かした、人形のような瞳で二人を見上げている。

「あなたは……翼ちゃん？」

奏美がそう呼び掛けるが相手は言葉どころか仕草を以て肯定も否定も与えなかった。とは云え、拒絶や無視を示している訳でもない。

「なあ翼。お前、あのでかいの、やつつけてくれたんだよな。感謝してる。ありがとう、お陰で死なずに済んだから」

「……」

「喋れないのはもう何となく分かったから、ただ伝えておきたくてさ。もしかしたら翼の姿をした別のもののなのかもしれないけど、それでもお前のお陰で色々何とかなったりもした」

「……」

「お前は……やっぱり、一緒には、来れないんだよな？」

英一が確認するようにそう問い掛けた。暫くの沈黙が漂ったが、翼は少しだけ破顔を見せた。それがどこか寂しげに映ったのは英一の気のせいだったのだろうか？ 彼はしかし釣られて頬を緩めた。傍らの奏美も英一を少し見て微笑みをこぼす。

「翼。俺と父さんは今でもお前を待ってるから。きつと帰って来るって、信じてるからさ。だから、もし聞こえているなら、俺の言っていることが分かっているなら……きつと、帰って来てくれよな」
英一はそこまで言って、奏美を見た。もう帰らなきやいけない。頷いた二人は翼に手を振って踵を返そうとする。翼はふつと右手を上げて何かを指さした。それは反対側にある部屋だった。不思議に思われながら再び二人が翼を顧みると、そこにはいつ消えたとも知れぬ様にその少女の姿は忽然と失われていた。それに驚く奏美だったが、英一がどこか見慣れた様な様子をしていたのを見て彼を見る。
「こう云うことも、まああったの？」

「まあ、そうかな。しかし、向こうの扉か……」

「あの部屋は前に坊之威さんと調べたけど、もう目立つものは何もなかったと思う」

「でも、明らかにあそこ指さしてたよな」

「うん……行ってみる？」

「まあ、ちよつとだけな」

周囲の様子が変わっていないことを確かめながら二人は開け放たれたままの扉を抜け中へ入る。荒れ果てた部屋を更に幾らか物色した痕跡があるばかりでやはり目立つものなど何もないところの筈だったのだが、ふと、二人は下から何かが聞こえるのを聞いた。……この部屋は一部床が抜けて下の階の部屋と吹き抜けている。下の部屋は寝台だったものらしき家具が大量に設えられた場所であり、そこへ入る扉もまた破損して床に崩れていた。故にこの部屋は廊下の声が漏れ聞こえやすい場所らしかった。

「お前さ……俺のこと、恨んでないわけ？」

「恨むって？」

紹と月子が一階西の廊下、下の部屋の壁際で話をしているらしかった。ふと英一はこの二人がどう云う関係だったのかを思い返す。本来ならただの部活仲間の筈だったが、東の湖を探索する際に今は亡き常人・百香共々行動を共にした。そして、恐らく内輪揉めが行き着くところまで行き着いた。思い出したくない携帯電話の着信を二人は嫌でも考えさせられた。

「おれと、常人がお前に何したか、覚えてない訳がないだろ」

「……」

「あの後も結局お前に頼りっぱなしで、それなのに文句一つ言わずにあのクソ碌でもなかった地下通路越える為に頑張ったじゃねえか。うざいくらい湧いて出た葦杜やら何やらの偽物連中に切らすまでスプレーぶっかけて、おれらの最後尾ずっと守ってくれたじゃねえかよ。めちゃくちゃに逃げ回ってるだけだったおれらのよ」

「そんな泣き言今更私に聞かせてどうしたいの？」

「なあ……おれらを見捨てる機会も、仕返しを、殺す機会だって幾らでもあったんじゃないのか。何で……ずっと、付いて来て、助けて、くれたんだよ」

「……」

「何とか、言えよ」

「……ハア」

それは明らかに呆れの溜め息だった。思うに月子とは本来こうまで頑健な、尋常でない局面に対し異様な耐性を見せる女だったと言えるだろうか？ 遭難に至った面々の中では行動力があり女子としては身体能力にも優れ、見ず知らずの大人である筈だった健と接触した後もこれと信頼関係を築いて協力出来る柔軟性を見せたりとこの苦難を乗り越えるにあたって不可欠に等しい人材だったことは間違いない。だがそうしたものがただ天性のみを以て与えられるものだろうか。本来なら二十歳にもならぬただの学生風情に過ぎぬ筈の女子に？ 英一は中庭で遂に合流を果たした折に見た月子を思い出す。あの硬質な雰囲気。異様で、どこか寄せ付けぬ風情。それでいて根っからの優しさ、氣立ての良さを失っていないのである。知った相手程偽物ではないかと思われる要素を示しながらその行為を以て彼女はただ仲間内に対し自らの価値と貢献を示し続けて来た。それ程の存在は英一には他に知らないのだ。死んだ游次郎でさえそこまでの人物とは言えるまいに。

「あなたや那於巴君みたいなナルの面倒を見るのは億劫でした、って言って欲しくてわざわざ呼び出したの？」

「違えよ！ ただ……何で、何もなかったかの様にずっと振舞ってやがるのが分からなくて、それが……何だか、癪だったんだよ」

「……じゃ、一つ教えてあげましょうか。何もなかった、と云うことにしておく方が得策だと感じたからそうしておいたのよ」

「そいつは葦杜や瀬之川の為か？」

「分からない？」

「……分からねえよ。おれはお前じゃねえんだから」

「馬鹿ね、女と云うものを分かってなさ過ぎるわ。英一だってもう少しデリカシーってもんが身に付いてるわよ」

「あいつの……何が良かったんだよ」

「何がって？」

「お前結局あいつと……っ」

遮られる様にその言葉は止まった。月子がふつと紹に寄ってその手で口を抑えたのをどことなく英一は想像した。どこか冷たい声音で月子が続けた。

「そんなことを口に出そうとするから分かってないって、言っただけだよ。結構女子と楽しく会話してる方だと思ってたけど、見込み違いだったのかしらね」

「……ちっ、そうだよ、おれは見込み違いってモンだよ。おれは中学以来肚の内じゃずっと女ってやつが怖かったんだからな」

「ふうん？ どうでもいいけど」

「このヤロ……」

「私があなたをそう扱う理由が分からない程サルではないでしょ？」

「……けっ」

「とりあえずね、これだけは覚えておいてね瑚潑君……私に懺悔なんてしないでね。いい迷惑だから」

足音が立ち始めた。どちらかが歩き出したらしい。と云って、それは続いた紹の言によって示される。

「どこ行くんだよ」

「私、やっとあなたや那於巴君についてお役御免になったと思ったから。だから、私は自分がいたい人の傍にいるわ。……ああ、そうそう」

「……何だよ、今更」

「一つだけ、お礼を言っておいてあげる。ありがとね。私、あなたたちのお陰で、自分の気持ちに氣付けたから」

その一言はひどく酷薄に、しかしどこか寂しそうに発された。そうして足音が北側へ移って行く。英一と奏美は部屋を出て速やかに廊下を北に移動した。三人はそうして階段にて立ち会う。月子はどこか驚いた表情をしていたが、そこへ奏美が脇目も振らずに抱き付いた。

「ちょっと、どうしたのよ奏美……」

「月子ちゃん……ごめんね、ごめんね……」

「いやだから、どうしたのよ、こんなところで……」

困惑を隠さない月子には二階でやり取りを聞かれていたことを感付いていないことがありと分かった。英一は涙ぐむ奏美を見、どことなく彼女がこの親友に詫げる理由を察した。同時にそれは、彼女にとって月子を今までより真っ直ぐに見ることへの遠慮を思い抱かせるようになるものでもあった。或いはこんなものこそが、今までの親友、幼馴染と云う枠組みの中で守られ続けて来た温暖で優しく、その永続を願いたくなる程の儚さを示していたのかもしれない。

三人に二階に長居する用事はなかった。それで早々に階段を下りたのだが、そこで突然に空間が黒く包まれ、変わった。奏美が驚く。だが英一と月子は不思議とそこまで驚かなかった。英一にとっては既に覚えのある状況であり、或いは月子にとってもまたそうだったのかもしれない。三人は荒れ野の山裾に立っていた。北を見据える先に遠く城が見える。異空の禍々しい空は曇天が掛かっていた。そしてその空の下よりゆっくりと降りて来るものがある。

「お前……」

「ココマデ多クノ者共ガ惑イ、狂イ、ソシテ果テテ来タモノダッタガ。アレヲヨリ逃レルドコロカ散ラシムルトハヨクヤッタト言ウベキデアロウ。悪夢ノ影ヲ悉クヲ払ワレシ今、希望抱エタオマエタチヲ前ニ次ナル悪夢生マレルマデ時ヲ待ツコトハ望メヌトコロヨ」

仮面の骸骨、《悪夢憑き》がどこか慨嘆する様にそう言う。月子が舌打ちでもしそうな表情を浮かべた。紹と呼ばれて出た時彼女は魔道書を中庭に置いて来たままだった。

「俺たちを殺そうってのか。本当はやろうと思えばいつでも出来たんじゃないのか？」

「ホウ、ソウ思ウカ。シカシ我ラハ悪夢……目覚メル時モ目覚メル処モ己ヲシテ定ムルコト能ワヌ。無論タダ縊リ殺スダケナラ今マデオマエタチヲ襲イシ者共同様ニシテヤレヨウガ……ソレナルノミデハ我ノ望ミシ悪夢ニ足ラズ。我ハ悪夢ノヒトヒラ、ソノ道化トシテオマエタチヲ淵ヘ追イヤルノガ己ノ務メヨ」

「心底意地の悪いものね」

「悪夢ニ意地ヲ見ル由ガアロウヤ？ 悪意サエ定ムルトコロナロウカヤ？」

「もう……止めて下さい。わたしたちの邪魔をしないで！」

「愛イコトヲ。ソノ望ミ手折ラレズニ在ル幸福ダケハ、囁ミ締メテ果テルガ良イ」

《悪夢憑き》が手をかざすと何かが形成される。それは骨で作られたように見える杖だった。英一は剣を抜いた。果たしてどこまで通じるのか、と微かに疑問を覚えたが迷っている場合ではない。

《悪夢憑き》はその杖を振るうと、地面よりぼりと音がして何かが這い出した。朽ちた屍が二つ、胡乱な動きをしながら向かって来る。

「下がってろ！」

英一は叫んで飛び出し、その片方に斬り掛かった。手応えはある。脆い骨肉は易々と切り裂かれ、屍は二つに断ち割られた。しかしその上半身は尚も動き出して英一の足を掴まんとする。避けながら顧みると月子が奏美を庇つてもう片方の屍に向かい合っていた。刈り取り鎌を握ってこそいるが自ら向かってゆくとうしない奏美に對し月子は素手でこそあったが躊躇わずに駆け、その胴に蹴りを叩き込んだ。屍は大きく吹き飛ばされる。しかしこちらもそれで動きを止めると云うには至っていない。

「サア、モット喚ンデヤロウ」

どこか悠々と《悪夢憑き》は言いながら再び杖を掲げる。今度は四つ地面から屍が這い出る。誰のものとも知れぬそれらはまるで肉を嗅ぎ求める様にのたのと三人に襲い掛かり続けた。こんなままでは勝負にもならぬことは明々白々で、英一は月子と奏美を見た。

「あいつをやる、付いて来てくれ！」

英一は《悪夢憑き》目掛けて走り出す。これを二人もまた追って動く。《悪夢憑き》はケタケタ嗤いながらこれを悠然と待った。英一が斬り付けるのに對し《悪夢憑き》はその杖をして受け止める。金属の高い音が響き、彼は打ち払われた。肉もない腕でありながら案の定怪力ではないか！ 英一は呆れさえ抱きながら続けざまに剣を振るって《悪夢憑き》を攻撃し続けるが、《悪夢憑き》は以前と違ってわざわざ空へ避けることすらせずにその杖で弾き続けた。月子は出来ることなら自分も蹴りの一つも入れてやりたいが相手は崖を背にしている為に急に飛び込んで落ちては元も子もないが故に奏美を守って屍を牽制しているしかなかった。二人は寄って来る屍をとにかくがむしやらに追い払わんとしているが、向こうはどれ程傷付いてもまるで痛痒とせずに襲い掛かって来る。

「次ゾ。ドコマデ続ケラレヨウカナ」

英一の攻撃の隙を縫うように《悪夢憑き》は杖をまた掲げた。今度は六つ、屍が地面から這い出して来る。ここは墓場か、と三人は思わされた。

「ソラ、気が逸レテオルゾ？」

「なっ！？」

《悪夢憑き》はぬっと英一の懷に踏み込んで杖をして彼の胸板を突き上げた。叩き飛ばされた彼は幾つかの屍を巻き込みながら地面に転がる。死にこそしていないが痛い。英一は立ち上がろうとするが、そこで足を屍の腐った手が掴んで来る。ふざけるなよ、と思いながら何とか握ったままの剣をしてその手を断ち切った。屍に追われる月子と奏美もこのままでは捕まるのが時間の問題だったが、ふと月子が視線を足元に落としてずっと何かを掴んだ。それは両断された屍の下半身だった。これを殴打武器に使うと云うのはどこかシュールな絵面ではあったが、徒手空拳のリーチよりは余程良いと考えたらしい。

「はあっ！！」

「ホホオ……」

この殴打で群がる屍が横薙ぎに殴り倒される。それで俄かに隙が出来、月子は《悪夢憑き》を睨んだ。相手もどこか楽しそうに月子を見る。月子が駆け出してこれに奏美が追いつがった。月子はその下半身を振りかぶる。そして投げた。

「くたばれっ！！」

投げ付けることは予想を超えていたらしい。《悪夢憑き》はひゅっと横に飛ぶ様にしてこれを躲したが、その拍子に杖の先端に当たってこれを取り落とした。杖は崖の急斜面を軽い音を立てて転がり落ちて行く。月子は少し笑った。

「ざまあ見なさい」

「中々活キノ良イコトデハナイカ。ダガコレ終ワツタ訳デハナイコトモ分カロナ？」

《悪夢憑き》がそう言って腕を掲げると、場の中央に何か黒い靄が現れ、それが霧散するように溶けて行く。その中から人影が現れた。

「瑚潑！？」

「え……なに、これ……」

紹が困惑しながらそう言う。屍共は手近な彼を取り囲み始めた。英一は慌ててそれを引き剥がすべく剣を振るおうとするが、やはり不意に目の前に《悪夢憑き》が現れた。《悪夢憑き》は英一の腕をがっしりと掴んだ。

「サア、見届ケヨ」

「何っ！？」

「うっ、うああああっ！！」

紹に四体ばかりの屍が組み付いた、組み付いた屍はその腐った顎を開いて彼に齧り付く。激痛に絶叫する紹の声が辺りにこだました。

「瑚潑くん！？」

「あ、ああああ、や、やめ、いだ、いだだだだだだああああああああっ！！」

月子と奏美は自分たちに襲い来る屍を振り払っているので精一杯だった。英一は掴まれた腕が動かず段々持ち上げられ始めており、微かな笑みを仮面の下より覗かせる《悪夢憑き》を憎々し気に睨みつけてもう片方の腕をしてこれを殴り付ける。どん、と手応えはあるがそれで相手が突き放されるでもない。英一は更にもう一撃しようとして、その手をもう片方の腕を以て掴まれた。

「あ、ああああああああああ、あが、あ、あ、……」

紹の声は小さく弱々しくなっていた。そこに英一は憎悪を膨らませる。どんな風になっても彼にとって紹は仲間で、友達だった。少なくとも月子に係る疑念は横に置いておくことを当人が望んでいる限りはそれ以前からの関係で十分だと言えた。その彼を、終ぞたった四人にまで減った部員の生き残りを戮り殺しにするこの化け物を憎まずに済ませることは彼には無理なことだった。

「放せ、放せよ、この悪魔め！」

「ソレデハ足リストモ、モット……モット、憎悪セヨ。絶望スラ憎悪シ、叫喚ヲ散ラシテ見セヨ。ソシテソノ無力ニ膝ヲ屈シ、我が身ヲ覆ウ悪夢ニ身ヲ委ネルガ良イ」

「五月蠅い、放せえっ！！」

ぎりぎりと言音する。彼は渾身の力を出している筈なのだが、この化け物は当然の様にそれと拮抗して見せていた。……辺りに血の香りが漂う。最早紹の声も、息遣いすら聞こえなくなっていた。ただ肉を喰らう汚い音が代わりに立っているだけだった。そしてそれを見た奏美が短い声を上げるのである。

「瑚潑くんが……、瑚潑くんも……」

「奏美、しっかりしなさい！」

月子が叱咤するが体力的にも精神的にも奏美は追い詰められていた。月子とて息が上がっていている。追い縋る屍共を追い払い続けるのも限界があった。相手は何度殴打されようが当たり前のように前に動き出して来る。両断された一体の様になっていればこの崖の外へ放り捨てることも出来なくはないだろうが、その余力も失われつつあった。屍の一体が遂に月子に組み付きその腕に齧り付いた。痛苦に顔を歪めながらも殆ど声を上げずに鬼気迫る形相を彼女は見せ、その腹を膝で突き上げる。吹き飛ばされた屍に取り合わずに月子は直ちに奏美を見ると、振るった刈り取り鎌が襲い来る屍に引っ掛かって取れなくなった彼女が半ば絶叫しながらこれを手放し、壁際に追い詰められようとしていた。月子はその屍の頭に振りかぶって鉄拳を叩き込み、横っ倒しになったそれから刈り取り鎌を素早く引き抜く。そしてその鎌を首筋へ振り下ろし、肉を切る音と共にこれを握じり切った。首だけになったそれ

は跳ねながら動こうとするが、流石に最早何もできない。胴体は痙攣の如くやはり跳ね続けている。月子は刈り取り鎌を呆氣に取られる奏美にそれとなく渡して屍の頭を髪の毛から掴んだ。

「食らえっ!!」

投げ付けられた頭は《悪夢憑き》へと飛んだ。《悪夢憑き》はこれを素早く顧みて英一を手放し、頭を避ける。そこへ英一は更なる追撃の突きを仕掛けた。これまでは躲し切れずその剣は《悪夢憑き》の胴体を貫く。……しかしその手応えは殆どスカかと思われるものだった。微かに骨らしきものを抉った感触があっただけで、そのローブの下にはやはり肉の一つもないらしい。《悪夢憑き》がしかし、少しだけ不如意を示す様に言う。

「一太刀、入レテ見セタカ。生者ノ執念モコレホドナレバ天晴レヨ。全ク、憐レナ程ニ」

《悪夢憑き》は剣の刃からこれを握り、ふわりと崖へ向かって飛び始める。英一は咄嗟に剣を手放し損ねた。突き立てられたままの剣を握った彼は《悪夢憑き》と共に空に浮かび、事実上その剣を支えにすることで落ちていない状況に立たされてしまう。

「英一っ!!」

「く、くっそお……」

「サテデハ、惜シムルベキコロデハアルガ……」

月子と奏美には打つ手もない。《悪夢憑き》は己に突き立てられた剣を片腕で引き抜き始めた。胴から刃が離れ、英一はいよいよこの人外の掴む手のみで支えられている形となる。この敗北は英一当人よりもそれを見る奏美と月子の方にこそむしろ深々とした絶望感を与えているのを英一は顧みる余裕もなかった。力一杯剣の柄を掴んで落ちない様にしている彼は何とか二人を鼓舞してやりたかったが、その術さえない。ただ焦燥と絶望の淵に立たされる中、こうこぼした。

「誰でもいい、奏美と月子を助けてくれ……!!」

《悪夢憑き》が手を離れた。瞬く間に英一は重力に引かれて転落し二人の視界から消える。英一の悲鳴が遠く響く。それを奏美が拒絶する様に絶叫し、傍らの月子はわなわなと震えていた。その二人に残りの屍が近寄りつつあった。……落ち行く英一は全てがどこか緩やかな速さをしているかに思われた。この無限のような一瞬の後に永遠の断絶と沈黙が待ち受けるのである。ただ風を切る全身の感触だけが確からしかった。それが失われた時、この命は終わる。そんなことを感じていた時、ふとその左手を誰かが握った様に見えて彼はそちらを見た。或いはこれもまたある種お約束、想定されてしかるべきところだったのかもしれない。そこには翼がまるで並走して滑空する様に落ちているのが見えた。翼は無表情をしていたがその視線を受けて、目を合わせ、微かに口を開いた。何と言ったのかは分からない、ひょっとしたら何か意味のあることを言った訳ではなかったのかもしれない。しかし英一には、ただ訳もなく頷き、この妹の為すところを信じるのみだと思われたのだった。

女二人に掴み掛る屍共を《悪夢憑き》は特に何も言わずに見ていたが、何かに気付いた様に下を見る。その直後、風をも追い越す様な速さで何かが己に突っ切って来ることを感知した《悪夢憑き》は慌ててその場を退く。しかし間に合わずそれは《悪夢憑き》の身体を下から斜めに切り裂いた。それにさえ言葉も投げ掛けず、己を痛撃した相手を見上げる。黒い陰影が彩る白い一对の翼を生やした少年が剣を握って空を飛んでいた。

「ナント……」

「お前は、許さない」

《悪夢憑き》が何かをする前に少年は空を蹴って崖上の屍へと襲い掛かった。その首を薙ぎ、腕を切り裂いて飛ばし、胴を両断して最早ただの肉塊たらしめる。屍餅を着いて座り込んでいた月子と奏美は何が起こったのか分からないままに相手を見上げた。その姿は英一を思わせたが、どこか両性的で儚い印象を抱かせる。

「えい、いち、くん……？」

「……」

少年は振り返って《悪夢憑き》を見た。その冷たい瞳を投げ掛けられようと《悪夢憑き》は動じなかったが、既に己の不利を認めざるを得なかった。どこか口惜しそうに《悪夢憑き》は言う。

「オマエモマタ、コノ地ヲ巢食ウ悪夢ノ筈ゾ。コレマデタダ彷徨ウテイタモノヲ、敢エテコノ者ヲヲシテ生カサントスル動機ガ有ルト」

「……」

少年は言葉を与えず更に飛んだ。《悪夢憑き》はその斬撃を辛うじて避けたが、ここで続けることの無意味をこれをして悟らざるを得ず、ひゅつと下へ落ちる。月子と奏美は崖際まで駆け寄って下を見ると、そのまま闇に溶ける様にして消える《悪夢憑き》の残影が微かに見られた。二人は翼を羽搏かせる少年を見た。少年は無表情をして下を見ていたが、だしぬけに二人へ視線を投げ掛けた。二人は少し緊張したが、次の瞬間には黒い靄に包まれ、それが消えた頃には中庭の入口まで帰って来ていた。

「君たち、無事だったのか！？」

中庭で兼輔と留まっていた健が駆け寄って二人に呼び掛ける。奏美はどこか現実味がない様にへたり込んだのに対し、月子は周囲を見回して、目を見開いたままにこう言った。

「英一が、いない」

そう言った直後、ボンと音を立てて中庭の一角に土煙が巻き起こった。何だ何だと兼輔が様子を窺うと、そこには地面に剣を深々と突き刺した姿勢の英一がその姿勢のまま意識を失っていた。それを見た月子と奏美が彼に駆け寄る。

「ああ、よかった、英一くん、生きてる……生きてるよ……！」

「生きてて……くれたのね、英一……」

涙ぐむ二人に健と兼輔は訳が分からんと云う具合であったが、二人が落ち着くまでは細々としたことを質すことは控えて感情が落ち着くのを待ってやることにした。暫くして英一も目を覚まし、漸く大人二人はそれまでの経緯を知らされる。この三人だけが帰って来たことに薄々察してはいたが、紹が更に帰らぬ人となったことに健や兼輔は慙愧に堪えないとして彼のことを悼んだ。その様子を見ていた奏美がふと月子を盗み見る。その顔はどこかもの悲しげであったので、奏美は問いかけた。

「月子ちゃんは……瑚潑くんのこと……」

「……」

奏美をじっと見た月子の顔にはただ何者かに対する真剣さだけを湛えた瞳が返って来ていた。どの様に答えることも彼女は望んでいないことはどことなく分かっていたことだったが、そこに彼への軽蔑だとかその不在に対する安堵の様な暗い、否定的な感情すら表出させないのは奏美にとって些か汲み難さを感じるものだった。凡庸に苦笑して誤魔化そうとしたり明け透けな態度を示して快哉を叫ぶでもないところ、それはこの女の至った境地であろうか。

「瑚潑はさ……最終的には《悪夢憑き》に理不尽にも殺された。俺にはそれ以上のことは……分らないよ」

英一が間を取り持つようにそう言った。月子は彼を見て、ここで漸く少しだけ悲しそうに、故人を悼むような顔をして頷いた。この言い方は月子がどれ程取り繕っても英一たちはどこか察していることを示してもいたものだったが、月子もまたこれを認識していた面もあったのだろう。あの電話に英一が出てしまった時点で本来誤魔化し切れるものではないところを、月子やあの二人の異様な沈黙の前に追求する勇氣、或いは愚を示さなかった帰結でもあったのだった。

紹のことはそれで済んだ一方、英一のことは当人もあまりよく覚えていなかったと当人は語る。崖下へ落ちてからここで目を覚ますまでの間、ただおぼろげに手を取った相手と共に空を飛んでいたと

云うことしか覚えていなかった。その手を取った相手について、月子が翼の名を出した。健と兼輔にとっては初耳の名でこそあったが、不思議と彼らはあまり懷疑しなかった。

「いや、我々も遭難初期の頃から、今はもう亡くなってしまった顔触れの中にこの森の中で幼い少女の姿を見たと言う者が何人かあってな。実は私も一度つきり、それらしい姿を見たことがあるのだが目の錯覚かと思っていたものだよ」

「俺は見たことこそなかったけど、死んだ友達がそいつに案内されて地下通路を抜けたって話してたことがあったから、半信半疑っちゃそうだがあったのかもしれないとは思ってたんだ。まあこの危険地帯に年端も行かない子供が堂々歩いていられるんならそいつもきつと、何か人間離れした漫画みたいな能力を持ってても不思議はないだろうと思う」

こう話す二人を見て英一は目を丸くして奏美と月子を見やった。月子はくすりと、奏美は優しく微笑んで彼を見返す。荒唐無稽ばかり起こっていい加減自分の頭もおかしくなったのかもしれないが、彼ら彼女らの優しさに彼は感謝したものだった。

「さて、大体のことは分かった。そろそろ脱出の試行に話を移そう。君たちがいなくなっている間に私たちが時空間転移マシンの修理を終え、後は実行に移すのみの段階となった。しかし既に話した通り、電池部分がやられており漏電と破損の危険から我々は一回きりしかこれを行うことは出来ない。一応可能な限り中身を取り除いて、少しでも燃焼しにくい様に砂を代わりに詰めて配線を変更してはあるが二度目はないものと思ってくれ」

「元よりマシンが正常に起動したならもうこの城からは消えているでしょう。二回目なんて考えるまでもないと思います」

「そうだな。さて、マシンの方は転移年代を二〇二六年の夏に指定している。君たちから聞いた時期になるべく到達出来る様に調整はしたが、完全に遭難当日へ帰れるかはやってみないと分からない」「バスがトンネルを抜けた後の時間に辿り着けるなら、この際いつであつても贅沢は言えないと思います」

「ありがとう。保護フィールドに関しては既にマシンの周りに円形の線を引いてある、大体その範囲内でこちらが用意した送電線に魔道書で電力を送り込めば起動出来るだろう」

「あの魔道書の魔法が本当に雷を起こしているらしくて助かりましたね」

「全くだ。これがなければいつ落雷があると知れん以上人力発電をすることも検討せねばならんかったところだからな」

五人は確認すべきことを終え、マシンの傍に立った。やはりと云うか、月子が魔道書を持っている彼女が本を開いたその時、地震が起こった。伏せろ、と健が叫んで五人とも素早くその場に蹲る。地震の揺れが収まらぬ中、地面の下から何か低く唸る声らしきものが聞かれた。

「この期に及んで何か来るのかよ!？」

「あの《悪夢憑き》がまだ諦めていないのかもしれない」

揺れが収まらぬ間に月子が声を上げて中庭の入口を指さした。どこから現れたか動く屍が群れを成して歩いて来ている。冗談ではないと思わされた英一は地に刺さったままの剣を掴むべく走り出す。揺れにたたらを踏まされながらもこれを掴んだが、思ったより深く刺さっているせいで抜けない。健が叫ぶ。

「葦杜君、戻りなさい! このまま起動して逃げ切るべきだ!」

そう言われては仕方もなく彼はマシンの傍へ戻ろうとする。中庭には続々と屍共の他に不定形の化け物や、今まで見て来た者らの姿を模した影が雪崩れ込みつつあった。月子が止む無く一つの魔法陣をなぞり、これを敵に放つ。雷撃が迸り、前を往き組み付きそうになっていた屍を一掃したがこれだけでは到底この集団を焼き払うには足りない。更にページを捲った月子は、不意にその捲った手に骸骨の手が添えられたことに気付く。

「！」

「流石ニ手段ハ選ベンノデナ」

いつの間にか月子の背後を取っていた《悪夢憑き》がもう片方の腕で彼女を抱く様に締め上げるとそのまま空に浮き上がる。何て奴だ、と英一は齒噛みしつつこれを見上げたがそれに応じている場合ではなく、残りの三人目掛けて襲い来る屍だのを引き剥がすべく円の中で組み付く。……月子は《悪夢憑き》を見上げた。いつになく渋い表情がどこかその仮面の下より覗かれた。

「ねえ、《悪夢憑き》」

「何カ惜別ノ言ノ葉デモ？」

「あなた自身は、どんな悪夢を見て来たの？」

その奇妙な問いは《悪夢憑き》にとっても想像しておらずまたそれ故に一瞬だけその思考が持つて行かれたものだった。その一瞬を見逃さなかった月子が骸骨の手をすり抜けてページを捲った。

「貴様……！」

「もし無いのなら、私がその一部になってあげるわ」

《悪夢憑き》はその動く右手を抑えつけたが、見れば月子は本を支えていた筈の左手の指を伸ばして最寄りの魔法陣にその指を掛けた。すつと引かれたその一指はそれを輝かせる。月子は下を、生き残った仲間たちを見下ろして言った。

「私に構わず、行って！」

稲妻が閃いた。その雷光はマシンに据えられた受雷針に直撃し、また飛散する様な雷閃がその周囲に襲い来る敵と云う敵を焼き尽くした。マシンが脈動する様に音を立て、周囲に見たこともない光が満ち始める。本当に起動したのか、と兼輔がこぼす。——英一と奏美は空を見上げた。《悪夢憑き》と共に浮かぶ月子が微笑んでいた。そして、力一杯の明るい声で叫んだ。

「英一！ 絶対、奏美と、幸せになってね、約束だからっ！！」

虹光の輝きを帯びた球体に英一たちは包まれる。英一と奏美は届かぬ声を叫んだ。そしてそのまま視界が、世界が一変する。輝きが消えた後に、マシンと共にいた筈の者たちは影も形もその場には残っていないかった。

歪んだ色の空の下に聳える城の一番高い天辺の屋根にて、少女は遠くを眺めている。その瞳には別なる空の、夕空の輝く太陽の下で起き上がりとする男と女が映っていた。二人は互いの無事を確かめ合い、辺りを見回してただ森だけが広がっていること、大切な友がいなかったことを知って、堪え切れず互いに肩を抱き合って号泣していた。……歪んだ空の下に聳えるその城の中庭に、真新しい屍が打ち捨てられている。二十歳にもならぬ女の引き裂かれた無残な屍。それを締め上げていた者はこの女を放り出した後、いたく不機嫌そうに姿を消した。その女の帰結を思うと少女は確かに、悲しいと思う。しかし肉体を持たぬその体は涙と云うものを流すことは叶わなくなって久しかった。ただ夕の風に当たって、その最期から来る痛切な思いを胸の内に抱いて、せめて忘れないでやりたいと思うのである。

少女の瞳は別の景色を移した。それは同じ様に歪んだ空の下だったが、そこには今しがたこの城より消えて元あるべきところへ帰還した者と瓜二つの男が共に迷い込んだ仲間たち共々森の中で骸を晒している。また景色が切り替わり、湖の畔で首を刺される女。また景色が切り替わり、……幾つとなしに情景を映したその瞳を閉じた少女は思う。自分が見た彼らは、運が良かった方だったのだと。異なる自分が確かめることが出来たのは、その多くは無残に果てて何も残らぬ結末だけだったのだと。……少女はふっと消えて、城の中庭に立っていた。荒れ果てた庭園。多くの墓穴と、墓穴も掘られぬ死者。少女は辛うじて残った女の頭に手をやり、それを優しくなでた。触ることも出来ず空振るが、

それでも手向けを自分ぐらいはしてやらねばなるまいと。それが終わって、どこか意識に眠気を感じた少女は最後に思う。この人が報われる道もありますように、と。

最終更新二〇二六年八月十六日